

一一〇一一年度

国

語

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（問題の都合上、省略した箇所があります。）

可笑しさのうちに、「ユーモア」と呼ばれるジャンルがある。普通の可笑しさと何が違うのかというと、非常に難しい。なんとなく知性が感じられるし、下品ではないことが条件だといえるかもしない。

ユーモアというのは、それに接したときに馬鹿笑いするようなことはない。シニカル（冷笑）気味などもあるが、けつして蔑んでいる笑いではない。につこりできる、ほつとできる、くすとできる、といった「小さな幸せ」をもらつたように感じられる貴重さがある。温かみが感じられ、優しさを感じる人もいるはずだ。多くの人が、ユーモアに魅力を感じるし、ユーモアのある人は、だいたいどこでも人気がある。

日本のお笑いには、このユーモアが感じられるものが少ないようだ。つまり、日本には古来なかつたセンスなのかもしれない。そもそも、「ユーモア」に相当する日本語がないことが、それを示しているだろう。「かわざや諧謔を弄する」という言葉があるけれど、誰も使っていないし、知っている人はたぶんほとんどいない。

ユーモアは、それほど技術的に難しいわけではない、と僕は思つてゐる。ただ、受け手を選ぶので、広い範囲での効果が期待できない、というデメリットがあるだろう。これは宿命的なものであるから、もしも誰にもわかるユーモアを発信しようとすると、その分ユーモア度は確実に落ちる。洗練されたユーモアというのは、一部の人気がくすと笑い、それ以外の人には「難解」と受け取られる。

小説に限らないが、近頃の活字メディアは、「読みやすい」ことが求められている。

文字が大きいこと、難しい漢字を使わないこと、などはもちろんだが、文章として簡単でマイカイなことが、重要な条件となつた。読みにくいものは、もうそれだけで受け付けてもらえない。

そもそもお金を出して活字を読むというのは、非常にマイナな趣味になつたので、その中でも読者を選ぶようでは、さらに消費者を少数に限定してしまう。

一方で、エンタテインメントの中では、活字で出力されるものが一番生産性が高い。一人で製作でき、しかも短期間で作り上げることが可能なので、生産者側から見れば、非常にコストパフォーマンスに優れている。それほど大当たりしなくとも、そこそこの

数が売れれば元が取れるジャンルなのだ。

だからこそ、「読みやすい」とには注意をしながらも、ユーモアのように相手を選ぶものも、ここでは生き残れるのではない
か、と僕は期待している。

人を笑わせるものには、意外なものと期待どおりのものがある、と既に書いたが、この一見反対の傾向のものが笑えるのは、どうしてなのだろうか？

意外性とは、期待を裏切るものであり、待っているところへボールが来なかつた、その「ズレ」や「ギャップ」が「可笑しさ」²を誘発する。おそらく、そこで、小さな驚きがあり、はつとなつて喚起される思考がある。それが可笑しく感じられるのだろう。また、逆に、期待どおりのものが出現することでも、人は笑う。これは、赤子が「いないないばあ」で笑うのと同様に、出るぞ出るぞ、と待つている緊張感からの解放にキーン^②しているものだし、はつとさせられることでは、「意外性」と似ている。

また、見たこともないものに出会つたときにも、可笑しくなることがある。不可解なものだつたり、意味がわからないことでも、人は笑う。意外性といつてしまえば同じであるが、やはり、「何だろう？」^③という注目が直前にある、という共通点がある。

珍しいもの、得体の知れないものには、まず注目し、緊張する。これは動物のホンノウだ。

A 笑いが生じる。

ユニークなもので笑えるのも、この部類だろう。ユニークとは、個性的なことだが、独特、
B 比類のないことを意味する。珍しいものは、誰にとつても意外なものである。興味を引くことで緊張を誘い、無害だとわかれば、解放感で思わず笑みがこぼれる、というメカニズムと考えられる。

「待つていてるところへボールが来なかつた」と書いたが、まったく取れないような大暴投では笑えない。あまりに外れすぎていると、驚きや呆れ^④が大きくなり、あるときは嫌悪感もイダいてしまうから、笑うことができない。

笑いを誘うギャップとは、「適度なズレ」であることが一つの条件といえる。この微妙な手加減ができる人が、人を笑わせる名手となる。ただ、受け手によって、このズレがどれくらいまで許容できるのか、が異なっているので、相手を見て、合わせる必要

があるだろう。このあたりが、「可笑しさ」を作ることの一一番の難しさになる。

「微妙」という言葉は、もともとは褒め称える表現だった。今は、「今一つ」という意味で、残念な印象を伝えるときに使う場合が増えている。可笑しさのズレというのは、本来「微妙」なものだった。加減をし、適度にずれているものが一番面白い。その僅かさが、最大の「面白さ」を生んだのである。

□ C、「可笑しさ」は、このズレ加減を常に意識し、不足ではないが、過剰でもいけない、という範囲をメザす意識が必要だろう。

そして、その加減は、人によつても、環境によつても、また時代によつても違つたものになる。昔のギャグでは笑えないのは、ズレの加減が違つてゐるからだ。

受けているからといって、いつまでも繰り返していくは駄目だし、受けなくとも、懲りずに長く続けていると、そのうち可笑しくなつてくるものもある。この場合は、受け手が学習し、成長するからである。

そういうた環境の変化に、作り手は敏感でなければならぬ。⁵もし、笑わせることが仕事ならば、それを長く続けるためには、いつも自分の方針を修正する必要があるだろう。笑わせることが、泣かせたり、怒らせたりするより、ずっと難しいのは、このようないう理由からである。

(出典 森博嗣『面白いとは何か? 面白く生きるには?』ワニブックPLUS新書による)

問一 線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 □ A～Cに入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ところが イ あるいは ウ さて エ そのうえ オ したがつて

問三　——線1「ユーモア」に関する内容として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 「諧謔を弄する」という言葉からわかるように、古来から日本人はユーモアにあふれる民族であった。

イ 一部の人にしか理解されないユーモアより、誰にでもわかるユーモアを発信できるよう心がけるべきだ。

ウ ユーモアはシニカル気味なところもあるが、人に安らぎや優しさを感じさせる魅力的な可笑しさだ。

エ ユーモアは技術的に難しいと考えられているので、日本のお笑いにはユーモアを感じられるものが少ない。

問四　——線2「ユーモアのように相手を選ぶものも、ここでは生き残れるのではないか」とあります。なぜ筆者はそう考

えるのですか。最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア エンタテイメントの中でも、活字で出力されるものは後から修正がきき、面白さをさらに磨くことができるから。

イ 世間では「読みやすい」ことが求められ、エンタテイメントの中の活字はそのニーズに完璧に応えているから。

ウ 活字によるエンタテイメントは生産性が高いので、それほど大当たりせずとも一定数売れれば利益が見込めるから。

エ 世間では、読書離れにより活字と触れる機会が減ったのを、エンタテイメントで補おうとする動きがあるから。

オ エンタテイメントの中でも、活字で出力されるものは人の目に触れやすいので、多くの消費者を獲得できるから。

問五　——線3「人を笑わせるものには、意外なものと期待どおりのものがある」とありますが、二つの笑いに共通することは何ですか。本文中から十字で抜き出しなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問い合わせも同じ。)

ア ユニークなものがあると恐怖を感じて体がこわばってしまうが、害がないことに気づくと解放感から思わず吹き出してしまうから。

イ ユニークなものを見るとおもしろそうだと期待するが、一方でその珍しさに戸惑っている自分がいることを滑稽に感じるから。

ウ ユニークなものに遭遇するとその珍しさに引き寄せられ、それが予想以上のおもしろさだとわかるとさらに楽しくなってしまうから。

エ ユニークなものがあるとその意外さにいつたん緊張するが、それが無害だとわかると緊張から解き放たれてつい笑みがこぼれるから。

オ ユニークなものを目にすると好奇心がわき、何としてでも触れたいという衝動にかられてしまう自分を可笑しく感じてしまうから。

問七

――線5「笑わせることが、泣かせたり、怒らせたりするより、ずっと難しい」とありますが、なぜですか。八十字以内で説明しなさい。

【】次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（設問の都合上、一部省略した部分があります。）

昼休みの教室には、机をくつつけたいくつもの島ができていた。大陸と呼びたいような大所帯もある。中学の給食の時間とは違う。めいめい仲の良い相手と昼食をともにすることができる。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みつつの島にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。

宮多たちは、にゃんこなんとかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さつきからぜんぜん会話に入れないので、課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。もう、相槌すら打てなくなってきた。

祖母の顔を思い出して、懸命に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるようなことなのだから。

「なあ、松岡くんは」

宮多の話す声が、途中で聞こえなくなつた。ふいに高杉くるみが視界に入つたから。

世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅっと持ち上がつた。虚勢を張るわけでもなく、おどおどするでもなく、たまごやきを味わつている。その顔を見た瞬間「ごめん」と口走つていた。

「え」

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」
ぽかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繡を集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。わかつてもらえるわけがない。ほんとうは『明治の刺繡絵画名品集』というぶあつい図録がよかつた。残念ながらそちらは貸出禁止になつていたのだ。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなつて、こうなつて。勝手に指が動く。

ふと顔を上げると、近くにいた数名がこっちを見ていた。男女混合の四人グループのうちのひとりが僕の手つきを真似て、くすくす笑つている。

「なに？」

自分で思つていたより、大きな声が出た。他の島の生徒たちが気づいて、こちらに注目しているのがわかつた。宮多たちも、でももう、あとには引けない。

「なあ、なんか用？」

まさか話しかけられるとは思つていなかつたのか、ひとりがぎよつとしたように目を見開く。2その隣の男子が「は？ なんなん」と頬をひきつらせた。

「いや、なんなん？ そつちこそ」

べつに。なあ。うん。彼らはも「も」こと言い合い、視線を逸らす。教室に、ざわめきが戻る。遠くで交わされるひそやかなざわめきや笑い声が、耳たぶをちりつと掠めた。

校門を出たところでキヨくん、と呼ばれた。振り返ったその瞬間に、強い風が吹く。

キヨくん。小学校低学年の頃のままに、高杉くるみは僕の名を呼ぶ。当時は僕も彼女を「くるみちゃん」と親しげな感じで呼んでいたのだが、学年が上がるにつれて会話の機会が減り、今ではもうどう呼べばいいのかわからない。

「高杉さん。くるみさん。どつちで呼んだらええかな？」

「どつちでも」

名字が高杉というだけで塾の子らに「晋作」と呼ばれていた時期があつて嫌だった、なので晋作でなければ、なんと呼ばれても構わないらしい。

「高杉晋作、嫌いなん？」

「嫌いじやないけど、もうちょい長生きしたいやん」

「なるほど。じゃあ……くるみさん、かな」

歩いていると、グラウンドの野球部やサッカー部の声がどんどん遠くなっていく。今日は世界がうつすらと黄色くて、遠くの山がぼやけて見えた。春はいつもそうだ。すべての輪郭があいまいになる。

「あんまり気にせんほうがええよ。山田くんたちのことは」

「山田って誰?」

僕の手つきを真似て笑っていたのが山田某らしい。

「私らと同じ中学やつたで」

「覚えてない」

個性は大事、というようなことを人はよく言うが、学校以上に「個性を尊重すること」と、伸ばすこと」に向いていない場所は、たぶんない。柴犬の群れに交じったナポリタン・マステイフ。あるいはポメラニアン。集団の中でもてはやされる個性なんて、せいぜいその程度のものだ。犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る。

アヒルはアヒルの群れに交じれば見分けがつかなくなる。その程度のめずらしさであっても、学校ではもてあまされる。浮く。くすくす笑いながら仕草を真似される。

「だいじょうぶ。慣れてるし」

(中略)

じゃあね。その挨拶があまりに唐突でそっけなかったので、怒ったのかと一瞬焦った。

「キヨくん、まっすぐやろ。私、こっちやから」

川沿いの道を一步踏み出してから振り返った。ずんずんと前進していくくるみの後ろ姿は、巨大なりュックが移動しているよう

に見えた。

石を磨くのが楽しいという話も、石の意思という話も、よくわからなかつた。わからなくて、おもしろい。わからないことに触れるということ。似たもの同士で「わかるわかる」と言い合うより、そのほうが楽しい。

ポケットの中でスマートフォンが鳴つて、宮多からのメッセージが表示された。

「昼、なんか怒つてた？ もしや俺あかんこと言うた？」

違う。声にして言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、気づいてしまつただけだ。自分が楽しいふりをしていることに。

いつも、ひとりだった。

教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がないのは、心もとない。ひとりでぼつんと弁当を吃るのは、わびしい。でもさびしさを「まかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もつともつとさびしい。

4 好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。その苦しさに耐える覚悟が、僕はあるのか。
文字を入力する指がひどく震える。

「ちやうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繡の本」

ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繡を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。「こうやって刺繡するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」ポケットにスマートフォンをつつこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

5 「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」

そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかつてもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐^{くび紐}がほどけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がぱしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受けた川の水面が風で波打つ。まぶしさに口の奥が痛くなつて、じんわりと涙が滲む。

(出典 寺地はるな『水を縫う』集英社による)

問一 ～線①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 線 a・b の語句の意味として最も適当なものを次のの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 嫌われる
イ ほめられる
ウ あきれられる
エ たよられる
オ 注目される

- ア 不便だ
イ 不審だ
ウ 不愉快だ
エ 不安だ
オ 不自然だ

a もてはやされる

b 心もとない

— 線 1 「途中で聞こえなくなつた」とありますか。なぜですか。四十字以内で答えなさい。(句読点等記号も一字に

問三

数える。以下の問い合わせ同じ。)

問四

— 線 2 「その隣の男子が『は？ なんなん』と頬をひきつらせた」とありますか。隣の男子の様子の説明として最も適當なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 僕が大きな声を出したことで多くの生徒から注目されたので、あせつている様子。

イ 僕にまさか話しかけられるとは思つていなかつたので、驚いておびえている様子。

ウ からかつた相手である僕が予想外に話しかけてきたので、不快に思つてゐる様子。

エ 僕が大きな声で話しかけてくれたので、思いがけずうれしく思つてゐる様子。

オ 以前から見くだしていた僕がやさしく話しかけてきたので、とまどつてゐる様子。

問五

— 線 3 「そのほうが楽しい」とありますか。何が楽しいのですか。本文中から十六字で抜き出しなさい。

問六

— 線 4 「文字を入力する指がひどく震える」とありますか。このときの僕の気持ちを五十字以内で説明しなさい。

問七

——線5「そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ」とありますが、僕の気持ちの説明として最も適当なものを次の
中から選び、記号で答えなさい。

- ア 宮多のほめ言葉をそのまま受け入れることができず、本心なのかどうかを確認せずにいられない気持ち。
- イ 自分の趣味をわかつてもらえないと思っていたのに、受け入れてもらえたことに驚き、うれしく思う気持ち。
- ウ 宮多に自分の趣味を分かつてもらえると思ったが、おだてるような返信だったことがつかりする気持ち。
- エ 自分の刺繡をほめたことで、宮多も同じ趣味を持つているということに気付き、心強く思う気持ち。
- オ 宮多が自分の刺繡をほめてくれた理由がわからず、喜ぶべきかどうかの判断がつかず困惑する気持ち。

〔三〕次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（出題の都合により、一部表記を変えた部分があります。）

（今となっては昔のことだが、唐の片田舎に）

（財産がない）

（財産を求めて得られなかつた。）（こうして）

今は昔、唐の辺州に一人の男あり。家貧しくして宝なし。妻子を養ふに力なし。求むれども得る事なし。かくて歳月を経。思ひわびて、ある僧にあひて、宝を得べき事を問ふ。智恵ある僧にて、答ふるやう、「なんち宝を得んと思はば、ただ誠の心を起がよい。」（そうすれば）

（財産を得られる方法を）

（答えて言うには）（おまえは）

（思うなら）²（起こす）

すべし。さらば宝もゆたかに、後世はよき所に生れなん」といふ。この人、「誠の心とはいかが」と問へば、僧の曰く、「誠の心を起すといふは、他の事にあらず。仏法を信ずるなり」といふに、また問ひて曰く、「それはいかに。たしかに承りて心得て、頼（あてにして）

（お教いいただきたい）

（間うと）

み思ひて、二なく信をなし、頼み申さん。承るべし」といへば、僧の曰く、「我が心はこれ仏なり。我が心を離れては仏なしと。³（だから自分の心したいで仏がおいでになるのだ）

（それにはどうすればよいのですか。）（お聞きしたことを理解して）

しかれば我が心のゆゑに仏はいますなり」といへば、手をすりて泣く泣く拌みて、それよりこの事を心にかけて夜昼思ひければ、

（梵天、帝釈天や多くの神々が来てお守りになつたので、思いも寄らず）

（暮らしも豊かになった）

ほんしゃく諸天来たりて守り給ひければ、はからざるに宝出で来て、家の内ゆたかになりぬ。

（出典『宇治拾遺物語』による）

問一　——線a「養ふ」・b「なんぢ」・c「ほんしゃく」を現代仮名づかいによる表記に書き改めなさい。

問二　——線1「思ひわびて」・3「いかが」の文中における意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 思ひわびて イ 思いをはせて ア 思い悩んで
　　ヘウ 思い知つて ウ 思いをとげて イ よいものだろうか
　　エ 思いをとげて ウ どのようなものか
オ 思い出して エ 見つかるだろうか
　　オ いつがよいのか

問三

——線2「ただ誠の心を起すべし」とありますが、「誠の心を起す」とは具体的にどうすることですか。「～こと。」に続く形で本文中から六字で抜き出しなさい。(句読点等記号も一字に数える。)

問四

——線4「三なく信をなし、頼み申さん」の口語訳として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 二回目があると確信をもてないので、あなたにおまかせします
イ 一心に信心を起こして、仏におすがりいたしましょう
ウ 一点だけ信じられないことがあります、ためしにやってみます
エ 二度と信用することはないので、仏にお願いなどしません

問五

本文の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 男の家は貧しく財産はなかつたが、家族を養うには十分だつた。
イ 僧は知恵があつたが、財産を得る方法については知らなかつた。
ウ 僧は男の話に同情し、自分の正体が神であることを告白した。
エ 僧の話に感動した男は、話の通り一日中仏神を拝み続けた。
オ 男の願いを聞いた仏神の力で、男は豊かな家の下に生まれかわつた。

①		②		③		④		⑤	
A		B		C					
問四									
					問六				

三	問一	a		b		c	
問二	1	3		問三			
問四				問五			12345

↓ ここにシールを貼ってください

